

ボランティア全国フォーラム 2016 報告書



2016年11月5日(土)・6日(日)

会場／国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)
主催：「広がれボランティアの輪」連絡会議
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

平成28年11月5日(土)、6日(日)の両日、国立オリンピック記念青少年総合センターで「ボランティア全国フォーラム2016」を開催いたしました。本フォーラムは、過去24年にわたって開催されてきた「全国ボランティアフェスティバル」を新たな形で引き継いだものです。

現在の社会では、多発する大規模災害における支援をはじめ、介護保険制度、生活困窮者自立支援制度等の国の新しい制度の中においても、ますますボランティアや市民活動に対する関心が高まりを見せています。こうした背景をふまえ、「全国ボランティアフェスティバル」がもつボランティア・市民活動の理解・普及、全国的な実践交流や相互研鑽の場という目的を引き継ぎつつ、更に「研究協議」の要素に重点を置いて本フォーラムを開催しました。

第1回目となる本年度は、「広がれボランティアの輪」連絡会議と全国社会福祉協議会の共催で、「広がれボランティアの輪」連絡会議の構成団体のメンバーを中心に企画委員会を立ち上げ、「ボランティア・市民活動の未来をみすえる」をテーマに企画を進めてきました。これまでのボランティア・市民活動のあゆみをふりかえりながら、これからの課題、そして課題解決のための糸口を共有し、参加者のみなさまが地域に戻られてから活動する際の参考となる企画になればと議論を重ねて当日を迎えました。

参加いただいた、一人ひとりのお気持ちと課題が共有され、実りのある有意義な時間をお過ごしいただけたのではないかと感じているところです。

最後に、本フォーラムにご参加いただいた皆さま、企画・運営にあたって協力いただいた皆さま、さらに、ご後援くださった文部科学省、助成くださった中央共同募金会、その他ご協力いただいた関係各位には、心からお礼と感謝を申しあげます。

来年度(2017年度)は、11月18日(土)、19日(日)に広島県と岡山県をまたぐ備後圏域(広島県福山市、尾道市、三原市、府中市、神石高原町、世羅町、岡山県笠岡市、井原市)にて「ボランティア全国フォーラム2017」を開催いたします。

備後圏域での再会を楽しみにしております。

平成29年3月
「広がれボランティアの輪」連絡会議
全国社会福祉協議会

1.「ボランティア全国フォーラム2016」の概要.....	3
2.大会プログラム.....	4
3.開会式.....	7
4.記念講演.....	8
5.トークセッションI・II.....	10
6.交流会.....	15
7.分科会・分科会共有.....	16
8.閉会式.....	27
9.参加者アンケート調査結果.....	28
◆ボランティア全国フォーラム2016	
企画委員会(VFPT)委員・運営スタッフ一覧.....	33

大会テーマ	ボランティア・市民活動の未来をみずえる
開催期日	平成28年11月5日(土)～6日(日)
会場	国立オリンピック記念青少年総合センター 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
内容	1日目：11月5日(土) 開会式・記念講演・トークセッション・交流会 2日目：11月6日(日) 分科会(5分科会)・分科会共有・閉会式
参加費	5,000円(大学生以下は、1,000円) ※交流会費については、別途5,000円
参加者	一般参加者 441名(うち、大学生以下23名) 企画委員 21名 運営スタッフ/ボランティア 36名 講師・出演者等 31名 その他 18名 合計 547名
主催	「広がれボランティアの輪」連絡会議 社会福祉法人 全国社会福祉協議会
助成団体	社会福祉法人 中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」
後援	文部科学省
協賛	一般社団法人 日本新聞協会
事務局	「広がれボランティアの輪」連絡会議事務局 (社会福祉法人 全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター内) 〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル TEL 03-3581-4656 FAX 03-3581-7858

過去24年間にわたり開催してきた「全国ボランティアフェスティバル」は「ボランティア全国フォーラム」に引き継がれました。

第1日目 11月5日(土)	
12:00～	■受付開始
13:00～	■ふりかえり～全国ボランティアフェスティバルの24年～
13:10 ～13:20	<p>■開会式</p> <p>■主催者あいさつ</p> <p>「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長 山崎 美貴子 全国社会福祉協議会 常務理事 渋谷 篤男</p>
13:20 ～13:50	<p>■記念講演 ボランティア・市民活動の未来 ～社会の変革とボランティア・市民活動の変遷～</p> <p>講演者：阿部 志郎 <<「広がれボランティアの輪」連絡会議 前会長 神奈川県立保健福祉大学 名誉学長 横須賀基督教社会館 会長>></p>
14:05 ～15:45	<p>■トークセッションI ボランティア・市民活動はどこへ歩むのか ～これまでの歩みと次への一歩～</p> <p>コーディネーター： 上野谷 加代子 <<「広がれボランティアの輪」連絡会議 副会長>></p> <p>登壇者： 原田 正樹 <<日本福祉大学 教授>> 石黒 学 <<愛知県社会福祉協議会 地域福祉部長>> 田尻 佳史 <<日本NPOセンター 特任理事>> 仁平 典宏 <<東京大学大学院教育学研究科 准教授>></p>
16:00 ～16:30	<p>■トークセッションII 明日への学び ～2日目の分科会へのバトン～</p> <p>コーディネーター： 原田 正樹 <<「広がれボランティアの輪」連絡会議 副会長>></p> <p>登壇者： 後藤 麻理子 <<日本ボランティアコーディネーター協会 事務局長>> 浅野 芳明 <<おもちゃの図書館全国連絡会 専務理事>> 山内 秀一郎 <<中央共同募金会 企画広報部 副部長>> 福島 宏希 <<JAVE 副理事長>> 楠田 祐輔 <<日本赤十字社東京都支部 主事>></p>
17:30 ～19:30	■交流会

第2日目 11月6日(日)	
9:00 ～12:00	<p>分科会</p> <p>■第1分科会 「まちの元気はみんなで作る～多様な協働が生み出す地域力～」</p> <p>コーディネーター 村上 徹也 <<日本福祉大学 招聘教授/市民社会コンサルタント>></p> <p>事例報告者 浦田 愛 <<文京区社会福祉協議会>> 秋元 康雄 <<こまじいのうち マスター>> 相内 俊一 <<ソーシャルビジネス推進センター理事長/小樽商科大学 特認名誉教授>></p>
	<p>■第2分科会 「ボランティアへのやる気を起こす“スイッチ”を探そう ～福祉教育・市民教育の視点から考える～」</p> <p>講師・コーディネーター 藤本 耕平 <<株式会社アサソー ディ・ケイ プランニングディレクター>></p> <p>事例報告者 畑佐 憲 <<子ども村 中高生ホットステーション 副代表>> 松田 暢子 <<日野ボランティア・ネットワーク 事務局長>> 鈴木 廣子 <<おもちゃの図書館全国連絡会 理事>></p>
	<p>■第3分科会 「非営利組織を育てる財源について考えよう ～出し手と受け手の「思い」をひとつに～」</p> <p>講師 鴨崎 貴泰 <<日本ファンドレイジング協会 事務局長>></p> <p>コーディネーター 山内 秀一郎 <<中央共同募金会 企画広報部 副部長>></p> <p>パネリスト 東郷 琴子 <<パナソニック株式会社 CSR・社会文化部 主務>> 木村 真樹 <<あいちコミュニティ財団 代表理事>> 鷹尾 大英 <<福井県共同募金会 主任>></p>
	<p>■第4分科会 「グローバル社会におけるボランティア活動～日本から世界、そして日本へ～」</p> <p>基調講演 谷山 博史 <<国際協力NGOセンター 理事長/日本国際ボランティアセンター 代表理事>></p> <p>コーディネーター 原 浩治 <<青年海外協力協会 国内事業部 グローバル人材育成課 課長>></p> <p>事例報告者 村山 昭 <<シャプラニール=市民による海外協力の会 事務局次長>> 穂積 武寛 <<難民を助ける会 プログラム・マネージャー>> 金城 ナヤラ ナツミ <<ブラジル友の会>> 千田 綾 <<多文化共生センター東京 事務局スタッフ>></p>
	<p>■第5分科会 「Youth Empowerment～ユースのパワーを社会に～」</p> <p>コーディネーター 赤澤 清孝 <<ユースビジョン 代表・大谷大学 准教授>></p> <p>事例報告者 荻野 友香里 <<フクシマ環境未来基地/栃木県若年者支援機構>> 東京都青年学生赤十字奉仕団協議会・学生 東京YMCA国際ホテル専門学校・学生</p>

第2日目 11月6日(日)

13:30 ~14:30	<p>■分科会共有 「明日へ、来年へ～シェアとエール～」</p> <p>コーディネーター 山崎 美貴子 <<「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長>></p> <p>登壇者 第1分科会: 村上 徹也 <<日本福祉大学 招聘教授 市民社会コンサルタント>> 第2分科会: 藤本 耕平 <<株式会社アサソー ディ・ケイ プランニングディレクター>> 第3分科会: 鴨崎 貴泰 <<日本ファンドレイジング協会 事務局長>> 第4分科会: 原 浩治 <<青年海外協力協会 国内事業部 グローバル人材育成課 課長>> 第5分科会: 赤澤 清孝 <<ユースビジョン 代表・大谷大学 准教授>></p>
14:30 ~15:00	<p>■閉会式 次年度にむけて 福山市社会福祉協議会 会長 橋本 哲之 閉会のことば 「広がれボランティアの輪」連絡会議 副会長 上野谷 加代子</p>

ふりかえり

～全国ボランティアフェスティバルの24年～

過去24年間にわたり開催してきた「全国ボランティアフェスティバル」が「ボランティア全国フォーラム」に引き継がれたことを受けて、全国ボランティアフェスティバルの24年間を振り返る映像を冒頭で投影しました。



開会式

開会式では、「広がれボランティアの輪」連絡会議の山崎美貴子会長、全国社会福祉協議会の渋谷篤男常務理事からそれぞれ主催者挨拶があり、「ボランティア全国フォーラム2016」の幕があがりました。



「広がれボランティアの輪」連絡会議
山崎美貴子会長



全国社会福祉協議会
渋谷篤男常務理事

ボランティア・市民活動の未来

～社会の変革とボランティア・市民活動の変遷～



あべ しろう
阿部 志郎 氏

「広げボランティアの輪」
連絡会議 前会長
神奈川県立保健福祉大学
名誉学長
横須賀基督教社会館 会長

阿部氏は、冒頭で、戦後の大規模農業のモデルとして誕生した秋田県大潟村が開村時に苦境にあったことを述べた。人と人とのつながりはなく、行き詰まった住民は自死に追い込まれた。こうした状況を前に、初代村長は「村に心がけない」と悩んでいたという。

同氏は、大潟村の問題から、社会福祉における補完性の原則について考えさせられたという。欧米では住民が地域に必要なことを自ら決め、地域でできないことは国が補完する「補完性の原則」が成立しているが、日本は逆の道を辿ってきたのではないかと提起した。それは、よし悪しの問題ではなく、ただ社会の仕組みが違うということであって、それをどう組み替えていくのかという問いの前に、いま私たちは立たされていると述べた。そして、人の幸せを願い、地域の心や中核をどこにおくのかということも、また、私たちの課題であることを強調した。

同氏は、大潟村において、血縁がない中でもコミュニティづくりが進められ、自立性が育まれていったことが、これからの社会のモデルになっていくのではないかと提起したうえで、次のような講演を行った。



戦争が終わって、経済成長が10年後から始まりました。キャッチフレーズのひとつは「バスに乗り遅れるな」。みんな一生懸命駆けて、人をかき分けてバスに乗りました。競争社会になったのです。走れない人がいることは念頭にありませんでした。人は愛の対象ではなく競争相手になったのです。そして勝ち組・負け組と分け、新しい子どもの問題が生まれ、今日までそれを引きずっています。今日の社会をいったいどうすればよいのでしょうか。

東日本大震災で50万の人が即席の2500の避難所に避難しました。水も食べるものもなく、毛布一枚なのです。寒いのに身を寄せ合って一晩過ごし、翌日の午後、温かいみそ汁とむすびが届きました。すると、避難所の人「山の裾にある避難所はもっと困っているから、先にもって行ってやれ」と受け取らない。海外の特派員は「苦難のなかで人格の尊厳をもって支え合っている人の姿を初めてみた」と大きく報道しました。

口蹄疫で支援を受けた宮崎県が24時間ぶっ通しで物資を運びました。中越地震で援助を受けた新潟県全市町村が即座に1万4000人を受け入れると決議しました。北海道の函館は228艘の漁船を岩手県に寄付をしています。昭和9年の大火の援助に対するお礼です。

これを互酬と申します。お互いに報い合う。私たちは互酬を大事にしており、互酬が社会化しているのです。

かつて血液は売買されていました。アメリカのライシャワー大使が暴漢に襲われたのを契機に献血に切り替えました。献血手帳には「あなたとあなたのご家族が血液を必要とするとき、あなたが献血された同量を優先的に確保します」と書いてありました。でも、いま皆さんが持っている献血手帳にはなにも書いて

ありません。なのに600万の人々が献血に参加している。互酬が普遍化したのです。

私は、これが地域のエネルギーではないか、これをどう伸ばしていくかということが一つの大きな地域づくりのポイントになると思います。

東日本大震災で、16歳の少年は津波が来るので逃げました。津波がひいて戻ると、自分の家の前まで全部洗い流されているのに自分の家は残っていました。この少年は、避難所にとって返して、家を流された人々に対して「申し訳ありません」と頭を下げたのです。なんと見事な少年でしょうか。

「ボランティアをしないのは恥ずかしい」と言わしめる社会を、子どもはどうすればつくっていただけるのでしょうか。16歳の少年に学びたいと思います。人が苦しみ、病み、弱っていたとき、自分は安全地帯にいることに負い目を感じるのです。だからボランティアは謙虚な姿勢で取り組むことができるのではないのでしょうか。

東日本大震災のとき、全国69の刑務所で集まった義援金が6000万円です。多くの受刑者がふた月分の労賃を捧げているのです。被災者の姿に接して、他人のことを考え、他人の幸せを願ったのです。刑務所に光が射したと思いました。否。刑務所から私どもに光を照らしてくれたのであります。新しい文明を包む文化が芽生えていく可能性を私は見ました。

これからのボランティアは新しい文化の形成に参加をしていく、しかも市民参加をしていくのがあるべき姿ではないかと思えます。早く行きたければ、一人で行きなさい。遠くまで行きたければ、みんな一緒に行きなさい。一人で焦り急ぐのではなく、みんな一緒にひと足ひと足と目標に向かって歩いていこうではありませんか。

トーク
セッション
I

ボランティア・市民活動は どこへ歩むのか ～これまでの歩みと次への一歩～

コーディネーター

上野谷 加代子（「広がれボランティアの輪」連絡会議 副会長）

登壇者

- 原田 正樹（日本福祉大学 教授）
- 石黒 学（愛知県社会福祉協議会 地域福祉部長）
- 田尻 佳史（日本NPOセンター 特任理事）
- 仁平 典宏（東京大学大学院教育学研究科 准教授）



上野谷氏 ■■■■■■■■■■■■

ボランティア・市民活動はどこへ歩むのでしょうか。一歩ずつ歩みましょう。しかし、歩むためには、これまでの経緯・経過を問わねばなりません。私たちの気持ちや活動や価値を次世代に送っていくためには論理的かつ研究的なものを残していくことも大事です。今回、第一回ボランティア全国フォーラムということでディスカッションします。

原田さんからは、ボランティアの活動の歴史的な部分、福祉教育という観点からもお話をいただこうと思っています。

石黒さんからは、「全国ボランティアフェスティバルあいち・なごや」開催後、ボランティアを市町に定着させながら実践をつくり出してきた県社協としての基盤づくりのお話をさせていただきます。

田尻さんからは、中間支援組織がどのような手立てで市民活動を進めていこうとし、いま、どのような到達点があり、課題があるのか、お話しさせていただきます。

仁平さんからは、最新の情報も含めお話をいただこうと思っております。

どうぞお願いいたします。

原田氏 ■■■■■■■■■■■■

1990年に社会福祉事業法（当時）の改正があり、多様なボランティア振興策が盛り込まれました。この背景には、在宅福



祉は住民の参加や協力がないと推進できないということがあったのだと思います。施策として多様なものが動き出したのが90年代の最初です。

これが始まった矢先、1995年に阪神・淡路大震災が発災し、このときが「ボランティア元年」といわれるようになったのはご周知の通りです。被災地に200万人もの人たちが駆けつけ、募金や物資を送った延べ600万・800万ともいわれる人がボランティアに関心を示しました。これがひとつの大きな契機となった一面があるのでしょうか。このときに「行政の限界」という言葉も出てきました。行政組織は公平で平等でなければならないという原則で動くのに対して、ボランティアは自由度がとてもあります。そして、この行政の役割とボランティアの役割は上下関係ではなく対等です。日本においては阪神・淡路大震災が一つの契機になり、それをもって「ボランティア元年」という新しい時代が出たのだ」と皆さんが訴えたのだと思っています。

では、ボランティアの原点をどこに探っていけばよいのでしょうか。関係者の我々がしっかりと原点に戻らなければいけないというときに、善意銀行を立ち上げた木谷宜弘先生の取り組みがあります。「助けてほしい」というニーズだけでなく、「社会の役に立ちたい」という地域のニーズもあります。これをつなぎ合わせてこそ、住民主体の活動が地域のなかに根づいてきます。これを善意



銀行というボランティアセンター（以下、VC）の前身として木谷先生は仕組みをつくってきたわけですね。木谷先生は「ボランティアとは相互実現の途である」という言葉が使われていました。「お互いによりよく生きていく自立のあり方。それこそがボランティアの途なのだ」と。ボランティアに学ぶということは、相互に支え合うということにもつながってくると思います。

今日的な課題ということでは、個人的に危惧をもっているのは、有償ボランティアという言葉がまた広がり始めていることです。例えば、介護保険制度では、要支援1、2は地域の中で支え合っていきましょう、そのときに無償ではやってもらえないだろうから有償で、というような言葉が動き出しているわけです。私は、有償ボランティアということに反対の立場をとっています。地域で有償ボランティアなんてことを始めたら、その町では子どもたちにボランティアを伝えられなくなってしまうと思うのです。20年前に同じ議論があり、各地のボランティアが声をあげました。このとき全社協はしっかりと受け止めて、住民参加型在宅福祉サービスと整理をしました。有償やポイント制度を否定するわけではないのです。ただ、それはボランティアとは言わずに、コミュニティサービスとしてしっかりと整理をしていく必要があるのではないかと考えます。

このようなことも含めて、福祉教育がとても大事だと思っています。どうすれば地域の一人ひとりの福祉意識を民主的で平和を希求する活動として作りあげていくことができるのか考えていかなければならないと思っています。

そのためには、ボランティアのマネジメントを考えていかなければいけませんし、多様なところで出てくる新しい問題を出し合って議論していく必要があります。その場に、ボランティア全国フォーラムがなっていけばよいと思っています。

石黒氏 ■■■■■■■■■■■■

「第16回全国ボランティアフェスティバルあいち・なごや」（以下、ボラフェス）は平成19年に開催し、2日目には県下6ブロックに分かれ52の分科会を開催しました。

実行委員会には293団体が参加し、95団体から協賛金をいただき、オール愛知で進めてきたことで非常に効果が出ました。市町村社協の協力により、事前に県内6ブロックで「ボランティア集会」を開催してきた実績が基礎となり、ボラフェスのブロックフェスティバルの開催にうまく移行することができました。

開催後の変化ということでは、市町村社協VC登録者数が急増しました。年間登録者数5000人が開催後に1万人～2万7000人ペースで伸び続け、平成27年度の登録者数は26万5803人と7万7000人ほど増えました。相談件数も多くなってきています。これもボラフェスの効果が出てきているのだと思います。

ボラフェスの継承事業という形で、県社協では大学生のボラ

ンティア連絡会を組織し、学生同士で情報共有する、イベントに参加する取り組みを行っています。市町村社協では「ブロックボランティアフェスティバル」を開催しています。

また、県社協では「社会貢献活動推進セミナー」を開催し、企業やNPO、自治会など多様な人たちが一堂に会して社会貢献について考える取り組みをしています。

課題ということでは、相談員といった協力者が激減している現状があります。

また、VCや福祉教育を若年の職員が担当する傾向が出てきており、地域に向いてコーディネートやマネジメントを行う機能が十分に果たされているのかといった課題が出てきています。

このような中で事業評価を行いました。調査結果をみると、10年前とあまり変化がありません。唯一、災害・防災への関心が伸びていることがわかりました。

これから、個別支援などもVCが中心となってコーディネートやマネジメントをしていかなければいけません。私たちはVCの基盤をもう一度立て直していくところに立っているところです。

田尻氏 ■■■■■■■■■■■■

日本では地域課題を解決しようとする住民運動が起こり、1980年代に民間の市民活動助成等の動きから、市民活動が出てきました。1980年から90年代に、少しずつ市民活動が成長するなかで、アメリカの社会ではボランティアに地域の活動に参加する人たちが多く、それも組織をつくって課題解決してきました。日本でも「市民活動に対するバックアップの仕組みをつくっていこう」という動きが出てきました。その頃、1995年に阪神・淡路大震災が起こり、ボランティア推進の法律をつくらうという話になりました。この両方が立ち上がってきて、民間の声を聞いた国会議員による議員立法により1998年に特定非営利活動促進法が誕生したのです。

その後、それほど急激に法人格をもつ団体が増えたわけではありませんが、2000年に制度的に規制緩和をするなかで、市民活動に対する期待が上がりました。行政や企業では対応できないような隙間の課題・個別課題を非営利の仕組みで解決していこうと期待されたのです。

もう一つは、地方分権を広げ、地域課題に合わせた行政サービスを展開しようというなかで、人材も財源も少ない市町村に



トーク
セッション
Ⅱ

明日への学び ～2日目の分科会へのバトン～

トークセッションⅡでは、2日目の分科会の各企画担当者よりその企画意図、ねらいについて話がなされたあと、原田氏との質疑応答で2日の学びのポイントについて語っていただきました。

コーディネーター

原田 正樹 (「広がれボランティアの輪」連絡会議 副会長)

登壇者

- 後藤 麻理子 (日本ボランティアコーディネーター協会 事務局長)
- 浅野 芳明 (おもちゃの図書館全国連絡会 専務理事)
- 山内 秀一郎 (中央共同募金会 企画広報部副部長)
- 福島 宏希 (JAVE 副理事長)
- 楠田 祐輔 (日本赤十字社東京都支部 主事)



交流会では、本フォーラムに助成をいただいた中央共同募金会の阿部陽一郎事務局長から乾杯のあいさつをいただきました。

参加者同士の交流の促進、新しいつながりができることを目的に企画した交流会には、全国から約200名が参加し、盛会に行われました。



中央共同募金会 阿部 陽一郎事務局長



交流会の様子



食事や飲み物を手に、参加者の交流が深まりました。



景品は日本生活協同組合連合会より提供



参加者の皆さんが交流をたくさんしていただけるように企画をして、会場は大いに盛り上がりました。

企画

- おもちゃの図書館全国連絡会 浅野 芳明
- 震災がつなぐ全国ネットワーク 松山 文紀
- 青年海外協力協会 原 浩治
- 青年海外協力協会 佐々木 学
- 青年海外協力協会 東 美聡
- 日本生活協同組合連合会 宮地 毅

第1分科会

(参加者:161名)

まちの元気はみんなで作る

～多様な協働が生み出す地域力～

概要

地域の中で多様な団体がうまく協働し、継続的な実践が行われている事例をもとに、改めて協働に必要な視点とそのプロセスを学びあうことを目的とする。はじめに村上氏から事例報告を聞くにあたっての視点についての話があった。その後、浦田氏と秋元氏から東京都文京区の「こまじいのうち」について、続いて相内氏から北海道で行っている「地域まるごと元気アッププログラム」についての報告があった。報告の後は、村上氏のリードでそれぞれの取り組みがスタートした経緯や詳細な追加報告があり、会場の参加者からの質疑応答を行った。休憩の後、会場からのリアクションによるパネルディスカッションを行い、活発な質疑が行われた。

主な内容

- 村上氏
まちの元気はみんなで作る。協働とは何か、協働の実現にはどんなプロセスが必要かに焦点を当てたい。何のために、誰と誰が力を出し合っているか、どんな工夫をしているか、その成果は、いかに相乗効果を生んでいるか、などに着目して報告を聞いていただきたい。
- 秋元氏
「こまじいのうち」のある文京区は職人の多い下町で、近年、高齢者が増加してきた。ゲストハウスに使用していた空き家を気軽に立ち寄り、集まれる居場所として提供した。地域活動センターに町会との連携や資金面の確保を協力してもらい、現在に至っている。カフェこま、脳トレ麻雀、ゆる育カフェ、てらまっち(子どもの学習支援)などを実施し、利用料として1人100～300円をもらっている。バザーは運営資金の確保のため年間2回実施して
- おり、売上は1回につき9万円程度。東京都の「地域の底力再生事業助成金」の交付を受けており、大きな財源になっている。助成金に大きく頼っているのが課題。若い人と高齢者が一緒に過ごせる場になっていることが素晴らしい。利用は地元住民以外にも開放している。たまたま寄ったという人もあり、遠方の方が地域の人と話すのも大切なこと。多世代交流は大歓迎である。
- 浦田氏
「こまじいのうち」は東京都文京区の駒込地区に平成25年10月にオープンした。主催者は町会連合会。一般的には高齢の女性の参加が大半だが、こまじいは多様なプログラムを用意しているので高齢男性、子供を連れた母親、小学生など参加者も幅広く、年間4,500人が参加している。平成24年から駒込地区の担当になって以来かかわっている。毎日地域をまわって活動し

コーディネーター

村上 徹也 <<日本福祉大学 招聘教授、市民社会コンサルタント>>

事例報告者

- 秋元 康雄 <<こまじいのうち マスター/東京都>>
- 浦田 愛 <<文京区社会福祉協議会/東京都>>
- 相内 俊一 <<ソーシャルビジネス推進センター 理事長、小樽商科大学 特認名誉教授/北海道>>

担当者コメント

少子高齢化が年々進む中、わが国の多くの地域で直面している課題の解決にむけた実践報告ということもあり、参加者からの質問や問題提起が活発に行われた。さまざまな団体が協働するには目標の共有化が大切である。しかし、今回の報告では、それぞれが見ている夢は違っても、最終的には取り組みを通して当初の目的は果たされている好事例があった。協働を実現するためには、関与者が共有できる解放された空間が必要であり、強い信頼と「おたがいさま」と思える関係のあり方が大切だという学びがあった。このような社会関係資本は競争原理の中では損なわれることもあるが、協働原理においては使えば使うほど強くなる。そのような協働する上での基本的な視点を理解することができたと思われる。

- ている専門職だからつながりを持てた。はじめはモデル地区として地域福祉コーディネーターを設置し、地域活動センターがかなり協力していたが、運営していく中で組織も変わりつつある。今年度からはNPO法人を立ち上げる方向で申請中。
- 相内氏
北海道には過疎化、高齢化、認知症増加、不自由化(医療・交通サービスなど)など多様な問題を抱えている地域がある。町と町の間距離があり、その間に何も無い。「地域まるごと元気アッププログラム」(まる元)はNPOとコープさっぽろと北翔大学の3者を基本とし、自治体とも結びついて4者の協働となって実現した。安心、安全、科学的であることを基本とし、軽度認知障害や歩行を困難に感じ始めた高齢者を早期に発見し、専門家による運動教室と元気な高齢者の運動普及活動(ゆる元)を通して
- 健康寿命の延長を目指そうというもの。「まる元」の「まるごと」とは「体も頭も心も地域も財布もまるごと」という意味。また、「ゆる元」とは「まる元」をゆるゆると行う、という意味で名づけた。「ゆる元体操」を指導できる指導者認定講座も実施しており、合格者には認定証を発行するとともにランクに応じて色の違うビブスを進呈し、動機づけをはかっている。
- パネルディスカッション
安全面の対応(災害時対応や訓練)、スタッフの報酬、学校とのかかわり、事業化にあたってのキーパーソンなどに関する質問が会場からあり、質問に答える形でパネルディスカッションを行った。



企画

JAVE 福島 宏希
東京ボランティア・市民活動センター 高橋 紘之
日本生活協同組合連合会 宮地 毅
日本生活協同組合連合会 尾崎 靖宏
日本ボランティアコーディネーター協会 後藤 麻理子

運営協力

日本生活協同組合連合会 笹川 博子
日本生活協同組合連合会 遠藤 陽子
日本生活協同組合連合会 西井 安紀子

第2分科会

(参加者:142名)

ボランティアへのやる気を起こす “スイッチ”を探そう

～福祉教育・市民教育の視点から考える～

概要

「ボランティアの仲間が足りない」「若い人の参加が少ない」など、ボランティアの輪を広げていくなかでの悩みがきかれる。様々な年代、様々なボランティアへのイメージをもつ人たちが、活動と出会い、豊かな体験の機会を通して継続的な参加へとつながっていくためには、どのようなきっかけが必要なのだろうか。大手広告代理店で若者をターゲットとしたマーケティング業務に従事している藤本耕平さんから、「つくし世代」と名付けた若い世代の特徴と、ボランティア参加への意欲を高めるために必要なことについて基調講演を受けた。また、東京都荒川区での子どもの居場所づくりや鳥取県日野町での地域のつながりづくりの取り組みについての事例報告や日本のボランティア活動の歩みを聞き、ボランティア活動へ参加を促すポイントを学び、参加者全体で学びを深めた。

主な内容

【基調講演】

■藤本氏

31歳以下の若者＝「つくし世代」の特徴は、「みんなで楽しみたい、みんなで喜びたい」「自分一人ではなく、誰かのために」を大切にすること。世間のムードより、自分のフィーリングに合った「自分のものさし」を大事にし、「ゆるい」「部分的」な「つながり願望」を持っている。ボランティアも、誰かのためだけでなく、自分のために参加するメリットがあることがポイント。ボランティアに興味のない若者たちを振り向かせるためには、経験づくり、新しいコミュニティづくりなど、「どんな成長ができそうか」を明確に伝え、メンバーの顔が見える仕掛けを作ることが重要。彼らを動かすには、「それな!」と共感できるもの、一緒に時間を共有したいと思わせるものを、打ち出すことだ。

【事例報告】

■畑佐氏

新卒で就職した企業を1年で退職した「つくし世代」の一員として、奉仕の気持ちより、自分の思うことを試してみた

という思いでボランティアに関わり、いまコミュニティーサービスの再構築を志している。子どもたちに夕食の提供を行いながら、地域の大人と子どもが日常的な接点を持ち、「子どもの居場所」となることを目指している「ホットステーション」。その中で、ボランティアスタッフの役割のマネジメントが課題になっている。参加する方々がそれぞれの役割に徹しすぎて、「子どもと接しない役割」が生まれ、一部のボランティアスタッフに疎外感を与えてしまったかもしれない。全てのボランティアスタッフが、活動のコアである「子ども」の周りにいるようにする、「子ども」と何らかの形でかかわるようにマネジメントしなければならないと思う。

■松田氏

2000年10月に起きた鳥取県西部地震の被災地・日野町。当時、人口4500人・高齢化率35%が、いま人口3300人・高齢率45%。被災後明らかになった「高齢者のケア」「ボランティア活動の日常化」「地域のつながりを強め『地域力』を高める」ため、2001年に日野ボランティアネットワーク

コーディネーター

藤本 耕平 <<株式会社アサツー ディ・ケイ プランニングディレクター/東京都>>

事例報告者

畑佐 憲 <<子ども村 中高生ホットステーション 副代表/東京都>>

松田 暢子 <<日野ボランティア・ネットワーク 事務局長/鳥取県>>

鈴木 廣子 <<おもちゃの図書館全国連絡会 理事/東京都>>

担当者コメント

ボランティアを増やすために、あえてボランティアとは縁遠かった広告代理店のプロデューサーにコーディネーターになっていただき、いまの若者の特徴を聞き、各地の取り組みを分析していただいた。若者は単に参加するだけでなく、そこで何かしら成長するために、自主性や自己裁量で何かをし、今後に生かせる何かを獲得することを求めていることがわかった。人数合わせ、力があるから、元気だからといったことだけで若者の参加を促すのではなく、彼らにどんな体験をしてもらうのか、何を自分たちで考え動いてもらうのか、明確にし、打ち出す必要を痛感した。さらに組織の中で若者たちが自ら意見を出せる雰囲気や場を用意することも重要だ。「つくし世代」と言われる若者たち。その良心的な部分に共感し、一緒に新しい組織を作っていこうとする必要を感じた。

が発足した。その取組のひとつが「高齢者誕生月プレゼント企画」。70歳以上の方だけで暮らす高齢者を、小学生から高齢者・町内外問わず幅広い人が手作りのプレゼントを持って訪問する。年間550人の高齢者を、のべ300人が訪問する。月1回、手作り、子どもから大人まで参加できる。など参加しやすい活動だからこそ、活動が継続し、地域のつながりが生まれ、震災の経験も引き継がれている。

■鈴木氏

戦後日本のボランティア活動の歴史を振り返り、そこでおもちゃの図書館が生まれた経緯を説明。ボランティアという言葉の定義から、どのような活動をしたらいいのか模索していた時期から、1981年国際障害者年を契機に、様々な分野への障害者の参加と機会の平等のために、母親たちが表に出て、多くの支援団体と協力し、イギリスへ視察に行くなどして、活動が広まっていった流れを解説した。いま全国のおもちゃの図書館の形態はさまざま。「おもちゃの図書館、みんな違って、みんないい」と思う。それぞれの地域、分野で取り組んでほしい。

【コーディネーターによるまとめ】

荒川で卒業した高校生がボランティアに参加するように、ボランティアがボランティアを育てる面がある。また日野町のように、月1回で継続してできる、誰もが参加できる仕掛けを作ること大事。戦後の歴史を見ても、母親の心を打ち公共の場で活動するなど、まじめにやっていると誰かの心を打つ。いま松岡修造さんのように「本気で熱い思いを伝える」ことで、若者は「何か面白い」と感じている。中高時代不登校だった子が施設の職員になったりする。「やってみる」「参加してみる」機会を作っていきます。

【「地域のフェスティバルで何かやりたい。いいプランはないか?」という会場からの質問にこたえて】

フェスティバルというワクワクした感じはいい。例えば、最近バーに砂場があって、そこに足を出して写真を撮れる「スナバー」が流行っている。参加すると面白いと思う情報を届けることが重要なのではないかと。私もこれを機会にボランティア活動にかかわってみたい。

企画

NHK厚生文化事業団 若井 俊一郎
おもちゃの図書館全国連絡会 浅野 芳明
東京ボランティア・市民活動センター 熊谷 紀良

運営協力

おもちゃの図書館全国連絡会 鈴木 訪子
おもちゃの図書館全国連絡会 青塚 和子
日本フィランソロピー協会 長谷川 まり



第3分科会

(参加者:38名)

非営利組織を育てる 財源について考えよう

～出し手と受け手の「思い」をひとつに～

講師

鴨崎 貴泰 <<日本ファンドレイジング協会 事務局長/東京都>>

登壇者

東郷 琴子 <<パナソニック株式会社 CSR・社会文化部 主務/東京都>>

木村 真樹 <<あいちコミュニティ財団 代表理事/愛知県>>

鷹尾 大英 <<福井県共同募金会 主任/福井県>>

コーディネーター

山内 秀一郎 <<中央共同募金会 企画広報部 副部長>>

概要

非営利団体(組織)が持続的に活動をしていくためには、ガバナンスや人材育成等とともに「資金の調達」が重要である。

この分科会では、日々の事業を継続する為の資金でなく、真に「持続可能な組織」であるためには避けられない組織の強化や、ステップアップを後押しする「外部からの多様な資金」に着目した。そして、「資金の出し手」と「受け手」の双方を交え、共に社会課題に取り組んでいくパートナーとしてのあり様を共有した。

主な内容

【基調講演】

■鴨崎氏

日本社会における寄付のはじまりから、最近の寄付市場について、海外との比較を通じて紹介。また、非営利組織を成長させるためのファンドレイジングのあり方について、定義・役割・原則等について紹介した。

昨今、社会的インパクト評価が重視されるようになってきた。これは、アウトプット(何を何回やったか)だけでなく、アウトカム(どれだけの参加があったか)が重視されている。

【パネルディスカッション】

■東郷氏

●「Panasonic NPOサポートファンド」における助成を通じたNPO組織基盤強化プログラムについての概要と助成先の声を紹介。

●パナソニックでNPOに助成を開始した頃に、NPOの組織

基盤が脆弱であり、基盤強化のしきみが無いことが課題として上がった。

●組織診断の実践において、助成団体自身が活動について客観的に考え、組織の経営や数字を意識するようになり、結果として組織基盤強化につながった。

■木村氏

●コミュニティ財団は補助金等の見込みが無いなかで、自分たちで課題解決をする仕組みをつくるために全国各地で出来てきた。

●あいちコミュニティ財団の特徴は助成先にお金を渡すだけでなく、伴走型支援を行うことであり、勉強会の組織等の横のつながりを作るようにしている。

●団体の成長を願うのであれば、お金だけでは足りない。助成活動に対するボランティアも派遣する。このように、伴走型支援をしながら、助成先に成果を求めていく。

●また、セオリーオブチェンジという指標を策定し、積極的に助成先を評価している。

■鷹尾氏

●「じぶんのまちを良くするしきみ」である共同募金について紹介。

●福井県共同募金会では、助成対象の団体に応募書の書き方等をレクチャーする講習会を開催している。講習会で、団体どうしのつながりができた。また、講習会を通じて、寄付してくれる人の約半数が、ボランティアの要請に応じることが分かった。ここから、既存の寄付者が会員獲得の入り口になる可能性になることがあり、助成に頼らないで自走していくことのできる基盤をつくることできる。

●助成が切れたら潰れてしまう団体も多い。活動団体の組織も大きくしていかないといけない。もう、地域は待たなしの状況。

【質疑応答・フリーディスカッション】

●参加者から質問票を通し、各登壇者へ多くの質問が寄せられた。

【まとめ】

出し手には、寄付をする人・助成を出す組織の2つの意味がある。また、受け手にも寄付を受ける・助成を受けるの2つの意味がある。どの場合にも、必ず同じ「思い」がある。その「思い」を上手く表現し、コミュニケーションをとることで、同じ気持ちを持つ仲間を増やしていくことができる。これが、ファンドレイジングであり、非営利組織が、より良い成果を挙げ社会に貢献することにつながる。



企画

損保ジャパン日本興亜福祉財団 丹保 有充
中央共同募金会 山内 秀一郎
中央共同募金会 小田 若奈

運営協力

中央共同募金会 丁 理恵
中央共同募金会 田中 佑樹

第4分科会

(参加者:30名)

グローバル社会における ボランティア活動

～日本から世界、そして日本へ～

概要

国内外を問わずグローバル化が進む現代において、世界と日本で起きている諸課題を理解し、以下の2つの視点からボランティア・市民活動として私たちにできることを探る。

- (1)海外で生じている課題に対して、どのような貢献ができるのか、また必要とされているのか
 - (2)国内で増加する外国人の方々との地域における関わり方、またそれがどのように必要とされているのか
- 実践者の話から現状を理解した上で、求められることが何かを伝えた。これにより、国内・海外を問わず、社会が抱える課題を共有し、私たちがどういった形で貢献していけるかを学ぶことができた。

主な内容

【基調講演】

■谷山氏
「グローバルな事象を通して見るボランティア組織の危機」
資源争奪や気候変動、対テロ戦争等の世界規模の課題やそれらに付随する新たな動きについて触れた後、TPPや安保法制等の日本と世界の関わりについて話があった。市民活動が広がりを見せる一方で、市民活動の抑圧も、世界だけでなく日本でも行われるようになってきている。

【登壇者 活動紹介】

■村山氏
シャプラニールは、バングラデシュやネパールを中心に、貧困支援・防災・減災・フェアトレード等を行っている。市民が参加できることとしては、フェアトレード商品の購入や寄付「ステナイ生活」、事務所におけるボランティア活動がある。

■穂積氏
難民を助ける会は、世界各国で現地スタッフを中心として活動を行っている。ボランティア制度は、平日フルタイムのボランティアから、土日のみ、イベントの企画運営専門ボランティアまであり、幅広く市民の力を活用している。

■金城氏
ブラジル友の会は、日本で暮らすことにより、母語を忘れてしまう外国人や、日本の学校の授業についていけない子ども達への放課後学習を実施している。日本語学習講師はボランティアにお願いしている。

■千田氏
多文化共生センター東京は、多国籍の子どもたちが通う「たぶんかフリースクール」や、日本語教室の運営を行っている。日本語指導にボランティアを活用している。

【パネルトーク】

- 外国人相手が故に活動を行っていく上でのやりがい、楽しさ又は困難な点
(村山氏)文化、風習、法律制度などが異なる点。
(穂積氏)同じ言語を使っているのにイメージしているものが違う点、一方で、その違いやギャップが楽しい。
(千田氏)日本人でも難しいが、それぞれの置かれた状況が違うので、叱ることの難しさを感じるが多い。
- 現状の日本社会に求める変換や理解/協力の促進について
(村山氏)日頃報道されない海外で起きていることを知る仕組み。活動資金やボランティアスタッフの募集。

基調講演

谷山 博史 <<国際協力 NGO センター 理事長、日本国際ボランティアセンター 代表理事/東京都>>

事例報告者

- 村山 昭 <<シャプラニール=市民による海外協力の会 事務局次長/東京都>>
- 穂積 武寛 <<難民を助ける会 プログラム・マネージャー/東京都>>
- 千田 綾 <<多文化共生センター東京 事務局スタッフ/東京都>>
- 金城 ナヤラ ナツミ <<ブラジル友の会/岐阜県>>

コーディネーター

原 浩治 <<青年海外協力協会グローバル人材育成課 課長/東京都>>

担当者コメント

谷山氏の基調講演を皮切りに、世界規模の課題に触れたあと、実際にボランティアとしてどんなことができるのか、各登壇者に話してもらった。参加者は、国外の活動に比べると、国内の外国人支援に関心があったように感じられた。また、参加者からの質疑をきっかけとし、前半の基調講演と後半の登壇者の具体的な活動内容をつなげることができた。質疑応答の中では、SDGs(持続可能な開発目標)にも触れ、地球市民として世界規模の課題に国内外に関わらず向き合っていかなければならないと感じることができた。この分科会を通し、「地域社会や個人がどのように市民団体と関わっていけばよいのか」について、参加者が少しでもヒントを持ち帰ってくれたならば幸いである。

- (穂積氏)「世の中を変えなければまずは自分が変わる」という考えから、ボランティアを増やしたいと思うなら窓口を増やす工夫が必要、続けてほしいのなら続けてもらえるようなインセンティブづくりが大事。
- (金城氏)日本社会における“移民”受け入れ認知。
(千田氏)子どもたちの学びの場の保障。
- 3.海外での経験が活かされる日本国内の事例
(村山氏)海外支援でつくった「コミュニティスペース」のアイデアが東日本大震災の際に役立った。
(穂積氏)アフガニスタンと日本の小学校での国際交流プログラム。顔が見える支援や交流は両者にとって意義があり、開発教育としてのインパクトも大きい。
- 4.地域における住民との関わり、活動の普及で理解促進において工夫していること
(金城氏)地域でのゴミ拾い等から始め、周囲に周知させた。
(千田氏)「たぶんかユースフェスタ」というイベントを通して発信、生徒や地域にとっても良い機会となった。
- 5.活動上注意していること
 - 上から目線、日本目線で考えないこと
 - “真の”、問題の見極め

- 団体のファンになってもらうことを常に意識している
- 発信する機会を設け、アイデンティティの強化につなげる。そういう活動を通して地域の人々に育ててもらう。
- 【質疑応答】
- Q.国内において、支援を必要としている外国人(生徒)をどのように探すのか
A.(千田氏、金城氏)口コミや、行政・学校関係者から紹介されることが多い。
- Q.基調講演において、市民活動が世界的な圧力により危機にさらされているということだったが、ボランティアはどう活動していけばよいのか
A.(谷山氏)権利はあるがそれを主張できない社会状況にあるため、制度を変える流れをつくる必要がある
(穂積氏)アフガニスタンと日本の学校の交流プログラムを通して、危ないと考えられている地域でも、何かしらできることがあるかもしれないと感じた。市民ができることを一緒に考えていくのが市民団体の役目なのではないか。
- Q.活動していく上で、日本社会における壁(行政、制度の壁を感じているか)
A.(金城氏)日本語ができない外国人は障害者扱い(特別支援へという指導がなされる)になってしまうケースがある。
(千田氏)テロ等があった次の日に事務所に非難の電話がかかってくることもある、原因は「知らない」ことにあると考えるため、まずは知ってもらうことが大事。



企画

JAVE 福島 宏希
青年海外協力協会 佐々木 学
青年海外協力協会 原 浩治
青年海外協力協会 東 美聡

運営協力

日本病院ボランティア協会 吉村 規男
日本病院ボランティア協会 矢内 愛子
全国社会福祉協議会 都賀 潔子

第5分科会

(参加者:30名)

Youth Empowerment

～ユースのパワーを社会に～

概要

近年、学校教育の現場でもボランティア活動の重要性が認識されつつある。欧米社会に比べ、ボランティアが決して高くない日本の社会において、特に若者(ユース世代)にスポットが当てられた。被災地でのボランティア活動、地域でのボランティア活動、環境ボランティア活動の3つの発題(活動報告)がされ活動を通して「人の役に立てた」「感謝された」「自分が変わった」という体験が語られた。参加者からはユースのボランティア活動体験の報告を聞き、はじめの一歩を踏み出す為のきっかけになったという声が寄せられた。

主な内容

コーディネーターの赤澤氏の進行で3事例について聞き、参加者相互で共有、検討する時間を設けた。

■発題1:環境ボランティア活動に関わるユース
(トチギ環境未来基地 Conservation Corps)
滞在型の中長期ボランティア活動に参加し、現在はコーディネートをしている若者の発表がされた。
3ヶ月間滞在中で森林整備をコア活動にしながら、子ども支援のプログラムや中山間地域の高齢者との交流がある。次世代のリーダー育成も意識した総合的なプログラムとなっており、地域住民をまきこみ、つないでいくことによって、本人の変化だけではなく、地域の変容も見られる活動を紹介された。

■発題2:地域に根ざしたボランティア活動に関わるユース
(東京都青年学生赤十字奉仕団協議会)
地域に密着した福祉課題等に関わる学生などの発表がされた。
日頃から定期的に活動している社会福祉施設での活動の中から2つの活動を紹介。
光が丘の地域を中心に活動している身体障がいがある方への活動、板橋区を中心に知的障がいがある方への活動を紹介。

■発題3:被災地でのボランティア活動に関わるユース
(東京YMCA国際ホテル専門学校)
熊本地震の被災地で活動する学生などの発表がされた。

コーディネーター

赤澤 清孝 <<ユースビジョン 代表、大谷大学 准教授/京都府>>

事例紹介者

荻野 友香里 <<フクシマ環境未来基地、栃木県若年者支援機構/栃木県>>
関 博隆、山田 茉悠子、豊田 俊輔 <<東京都青年学生赤十字奉仕団協議会/東京都>>
白石 茉莉花、南 彰太、横田 紀之 <<東京YMCA国際ホテル専門学校/東京都>>

担当者コメント

若者がボランティアに参加しやすい仕組みと仕掛けをますます作る必要があることを、参加への意識の格差から感じる。若者自身のポジティブな発信がこれからも期待されていると思う。その仕掛け、仕組みを作り、壁をとりはらっていくことにより、多くの若者が様々なボランティア活動に参加すれば、やはり大きなパワーを発揮することを感じた。インターネットの進歩やSNSの発達により、現代の若者は発信力を兼ね備えている。ボランティアに参加した若者が「やりがい」を感じ、感謝されることの喜びを感じていくこと、またそれを発信していき共感を得ていくことは社会全体をより良い方向に導いていくことに繋がっていくと感じる。

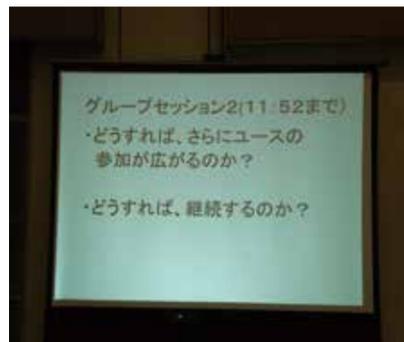
東京YMCA国際ホテル専門学校の学生13名が熊本地震の被災地に行き、復興支援のボランティア活動を行った。益城町総合体育館(避難所)、御船町スポーツセンター(避難所)、阿蘇YMCAボランティアセンターの3ヶ所での支援活動の報告がされた。

■グループセッション1:想いの共有
3つの事例から触発された想いを共有する時間が持たれた。複数のグループに分かれ参加者と登壇者が様々な立場からボランティアに対しての想いや考えを自由に発言できる時間となった。

■グループセッション2:今後の活動への期待
自分の活動や所属・スタンスなどと重ねて、今後の活動展

開を検討する時間が持たれた。現在活動しているボランティアを今後も継続していくために必要な要素や条件は何かを各グループで話し合いがなされた。

■まとめ
ユースの活動が広がっているように感じながらも、活動しない人との格差も開いていることが事実としてあり、どのようにすればユースの参加が促進され、広がっていくのか、また継続していくのか、検討していくことが期待されている。



企画

児童健全育成推進財団 阿南 健太郎
日本赤十字社東京都支部 楠田 祐輔
日本YMCA同盟 有田 征彦

運営協力

助成財団センター 田中 皓
日本赤十字社 松原 智栄子
日本赤十字社 佐藤 祐輔
日本YMCA同盟 真鍋 泉

分科会共有

テーマ

明日へ、来年へ

～シェアとエール～

コーディネーター

山崎 美貴子 <<「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長>>

登壇者

- 第1分科会：村上 徹也 <<日本福祉大学 招聘教授、市民社会コンサルタント>>
 第2分科会：藤本 耕平 <<株式会社アサツー ディ・ケイ プランニングディレクター>>
 第3分科会：鴨崎 貴泰 <<日本ファンドレイジング協会 事務局長>>
 第4分科会：原 浩治 <<青年海外協力協会国内事業部 グローバル人材育成課 課長>>
 第5分科会：赤澤 清孝 <<ユースビジョン 代表・大谷大学 准教授>>

主な内容

各分科会の登壇者より、参加者のアンケートの声を土台にして、午前中の分科会の概要をお話いただきました。

最後に、コーディネーターの山崎会長から総括として、次のことが述べられました。

「自分事として、地域住民が、わが地域の問題を当事者として、それを考えてくれる人たちとできるだけ厚みをつけていく必要があること。そのためには共感の成果を見える化して伝えましょう。」

市民は地域市民、日本市民、地球市民として、当事者として、活動できる出番をつくりながら、共感の輪をどうやって見える化していくか。確かに行政とつながっていくやりかたもある一方で、一定の距離をとって、活動をする活動をする方法もあります。いろいろなステークホルダーとつながって、マルチな関係をつくりながら新しい価値を創造するというやり方もあります。今回、5つの分科会で得たことは小さな学びかもしれませんが、地域に帰ってこの学びを共有し、共感の輪がつながることを願います。」



閉会式

福山市社会福祉協議会
橋本哲之会長

来年度の「ボランティア全国フォーラム2017」の開催地の備後圏域[※]を代表して、福山市社会福祉協議会の橋本哲之会長より、開催日(2017年11月18日・19日)の発表と、次回もぜひ参加いただきたいとの挨拶がありました。

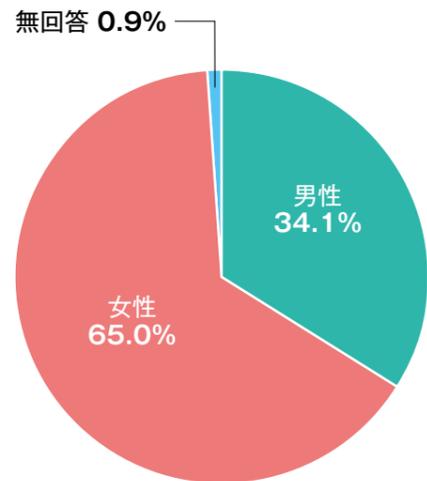
※備後圏域:広島・岡山の両県にまたがる地域6市2町(広島県福山市、尾道市、三原市、府中市、神石高原町、世羅町、岡山県笠岡市、井原市)のこと。

「広がれボランティアの輪」連絡会議
上野谷加代子副会長

2日間にわたるボランティア全国フォーラム2016の閉会式は、主催者を代表し、「広がれボランティアの輪」連絡会議の上野谷加代子副会長より、参加者へのお礼の気持ちを伝え、閉会の挨拶としました。

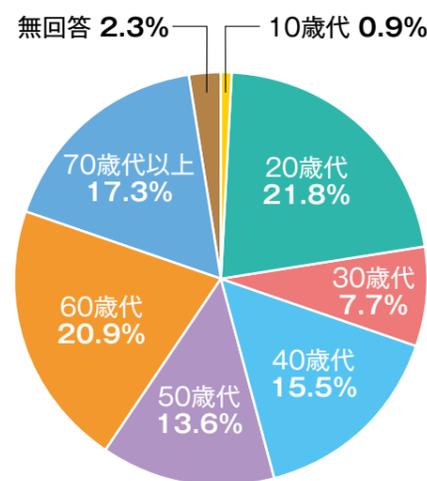
1 性別

アンケート調査の回答者の性別は、男性34.1%、女性65.0%。



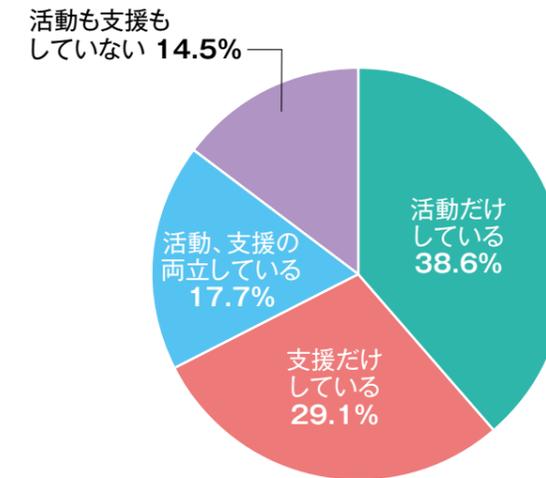
2 年齢

年齢は、20歳代以下22.7%、30-50歳代36.8%、60歳代以上38.2%。



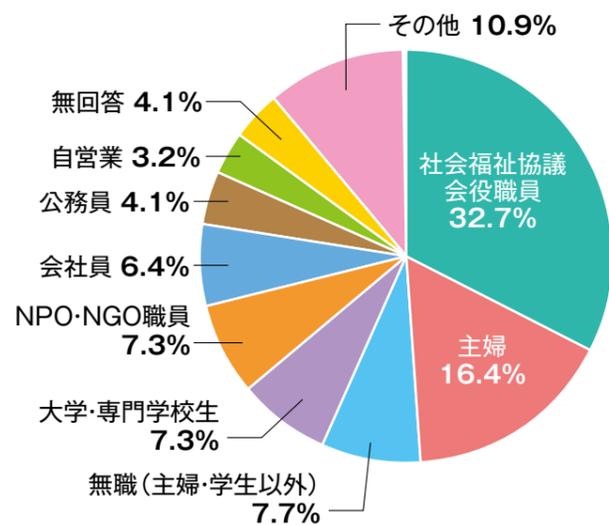
4 ボランティア活動をしている、ボランティア活動を支援(推進)している参加者数の有無

ボランティア活動を支援(推進)している参加者の割合が46.8%を占めた。



3 職業等

社会福祉協議会職員と主婦で49.1%を占めている。



■人数の多いもの順

	人数(人)	割合 (%)
社会福祉協議会役員	72	32.7
主婦	36	16.4
無職(主婦・学生以外)	17	7.7
大学・専門学校生	16	7.3
NPO・NGO職員	16	7.3
会社員	14	6.4
公務員	9	4.1
自営業	7	3.2
小中学生	0	0.0
高校生	0	0.0
協同組合	0	0.0
無回答	9	4.1
その他	24	10.9
合計	220	100

5 関わっているボランティア・市民活動の分野

活動分野は、「福祉」が最も多く66.4%、次いで「子どもの健全育成」41.4%、「ボランティア・市民活動の連絡・助言・援助」41.4%など。

■関わっているボランティア・市民活動の分野 (人数の多いもの順/複数回答可)

	人数(人)	回答数220に対する割合
福祉(高齢者・障害者等)	146	66.4
子どもの健全育成	91	41.4
ボランティア・市民活動の連絡・助言・援助	91	41.4
まちづくり	69	31.4
災害救援活動	68	30.9
地域安全活動	37	16.8
学術・文化・芸術・スポーツ	31	14.1
社会教育	29	13.2
環境保全	28	12.7
保健・医療	22	10.0
国際協力	19	8.6
その他	16	7.3
人権擁護・平和推進	8	3.6
職業能力開発・雇用機会拡充	6	2.7
経済活動活性化	3	1.4

6 参加理由

参加理由は、「ボランティア・市民活動に参加しているから」62.3%、「全国の動向や活動事例が知りたいから」48.2%、「ボランティア・市民活動に興味があるから」22.7%など。

■参加理由 (複数回答可)

	人数(人)	回答数220に対する割合
ボランティア・市民活動に参加しているから	137	62.3
全国の動向や活動事例が知りたいから	106	48.2
ボランティア・市民活動に興味があるから	50	22.7
全国の実践者と交流したいから	43	19.5
友人・知人が参加・出演するから	14	6.4
その他	17	7.7

7 本フォーラムのことをどうやって知ったか

情報の入手方法は、「主催団体からの案内・チラシ」が最も多く43.2%、次いで、「機関・団体等からの紹介」37.7%、「主催団体以外からの案内・チラシ」13.2%など。

■知った方法 (複数回答可)

	人数(人)	回答数220に対する割合
主催団体からの案内・チラシ	95	43.2
機関・団体等からの紹介	83	37.7
昨年度の全国ボランティアフェスティバル福島に参加して	29	13.2
友人・知人からの紹介	13	5.9
ホームページ・Facebook	13	5.9
主催団体以外からの案内・チラシ	10	4.5
その他	10	4.5

10 フォーラム2日目(11月6日)の参加状況

参加状況は下表の通り。
2日目の全体のプログラムで、分科会は90.0%、分科会共有は70.0%、閉会式は52.5%。

■2日目のプログラムの参加状況 (複数回答可)

	人数(人)	回答数220に対する割合
分科会	180	90.0
分科会共有	140	70.0
閉会式	105	52.5

11 ボランティア・市民活動について、参考となる全国的な情報発信や課題提起がなされていたと思うプログラムはどれですか。

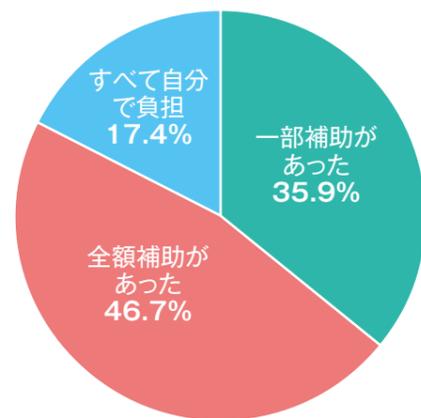
参考となる全国的な情報発信や課題提起がなされていたと思うプログラムは、「分科会」が最も多く63.9%。

■参考となったプログラム (複数回答可)

	参加者数	回答数(人)	参加者数に対する割合
分科会	180	115	63.9
分科会共有	140	41	29.3
記念講演	188	66	35.1
交流会	117	44	37.6
トークセッション	367	87	23.7
開会式	183	18	9.8
閉会式	105	6	5.7

8 参加にあたっての費用(参加費・交通費)

参加費用は、「すべて自分で負担」17.4%、「一部補助」35.9%、「全額補助」46.7%、何らかの補助があった合計は82.6%。



9 フォーラム1日目(11月5日)の参加状況

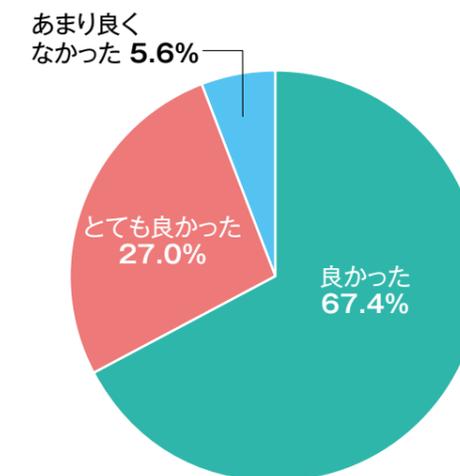
参加状況は下表の通り。
8割超が全体のプログラムに参加し、約半数が交流会に参加した。

■1日目のプログラムの参加状況 (複数回答可)

	人数(人)	回答数220に対する割合
記念講演	188	85.5
トークセッションI	185	84.1
開会式	183	83.2
トークセッションII	182	82.7
交流会	117	53.2

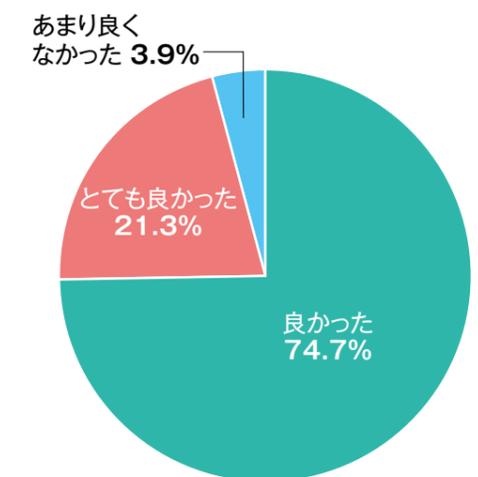
12 今後の取り組みの参考になったかの評価

今後の取り組みの参考になったかの評価としては、「とても良かった」27.0%、「良かった」67.4%で、合計の「満足(計)」はおおよそ94.4%。



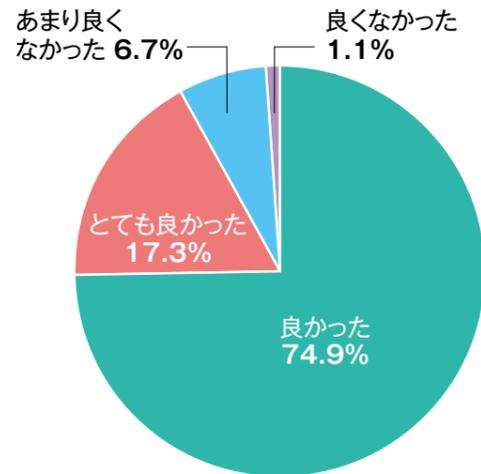
13 本フォーラムは全体的にスムーズに運営・進行されましたか

本フォーラムは全体的にスムーズに運営・進行されたか、の評価としては、「とても良かった」21.3%、「良かった」74.7%で、合計の「満足(計)」は96.0%。



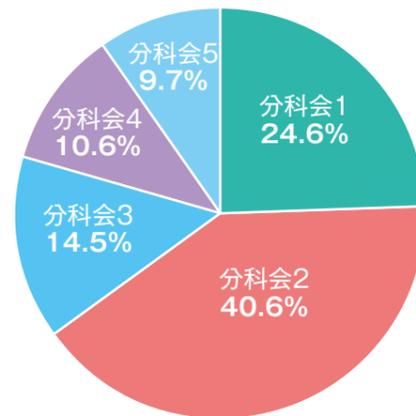
14 本フォーラムに満足されましたか

本フォーラムの満足度としては、「とても良かった」17.3%、「良かった」74.9%で、合計の「満足(計)」は92.2%。



15 参加した分科会

アンケート調査の回答者が参加した分科会の内訳



16 分科会を選ばれた理由

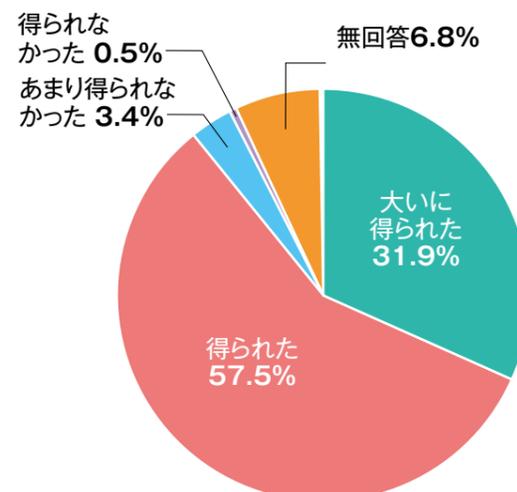
分科会を選んだ理由は、「テーマ・内容で」が主な理由で81.2%を占める。次いで「人の勧めで」6.3%など。

■参加理由 (多いもの順/複数回答可)

理由	人数(人)	回答数220に対する割合
テーマ・内容で	168	81.2
出演者で	9	4.3
実施形式で	1	0.5
人の勧めで	13	6.3
知人・仲間が企画運営しているため	9	4.3
第1希望以外の分科会に参加するよう調整を受けた	11	5.3
その他	2	1.0

17 今後の活動のために得られたこと、活かそうと思われたことがありましたか

今後の活動のために得られたこと、活かそうと思われたことが「大いに得られた」31.9%、「得られた」57.5%で、「得られた(計)」は89.4%。



◆ ボランティア全国フォーラム2016 企画委員 一覧 ◆

所属	氏名
学識者 (神奈川県立保健福祉大学 顧問・名誉教授)	山崎 美貴子
中央共同募金会	山内 秀一郎
	小田 若奈
東京ボランティア・市民活動センター	熊谷 紀良
	高橋 紘之
日本生活協同組合連合会	尾崎 靖宏
	宮地 毅
日本赤十字社東京都支部	楠田 祐輔
全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センター	高橋 良太
日本NPOセンター	田尻 佳史

所属	氏名
日本YMCA同盟	有田 征彦
日本ボランティアコーディネーター協会	後藤 麻理子
JAVE	福島 宏希
おもちゃの図書館全国連絡会	浅野 芳明
損保ジャパン日本興亜福祉財団	丹保 有充
青年海外協力協会	佐々木 学
	原 浩治
	東 美聡
震災がつなぐ全国ネットワーク	松山 文紀
児童健全育成推進財団	阿南 健太郎
NHK厚生文化事業団	若井 俊一郎

◆ 当日運営スタッフとしてご協力いただいた皆さん(役職・敬称略) ◆

荒川区社会福祉協議会	武田 純子	日本赤十字社	松原 智栄子
荒川区社会福祉協議会	数田 真理子	日本赤十字社	佐藤 祐輔
おもちゃの図書館全国連絡会	青塚 和子	日本病院ボランティア協会	吉村 規男
おもちゃの図書館全国連絡会	鈴木 訪子	日本病院ボランティア協会	矢内 愛子
おもちゃの図書館全国連絡会	安達 恵	日本フィランソロピー協会	長谷川 まり
おもちゃの図書館全国連絡会	増田 ゆき	日本YMCA同盟	真鍋 泉
おもちゃの図書館全国連絡会	隅田 ひとみ	全国社会福祉協議会	都賀 潔子
おもちゃの図書館全国連絡会	柚口 千佳	全国社会福祉協議会	水谷 詩帆
おもちゃの図書館全国連絡会	山本 文子	全国社会福祉協議会	古橋 美絵子
おもちゃの図書館全国連絡会	箭内 貴史	全国社会福祉協議会	志村 宏祐
助成財団センター	田中 皓	チャイルドライン支援センター	梅沢 元彦
日本生活協同組合連合会	笹川 博子	中央共同募金会	丁 理恵
日本生活協同組合連合会	遠藤 陽子	中央共同募金会	田中 佑樹
日本生活協同組合連合会	西井 安紀子	東京ボランティア・市民活動センター	長谷部 俊介
日本生活協同組合連合会	前田 昌宏	帝京科学大学学生のみなさん	

◆ 事務局 ◆

全国社会福祉協議会
全国ボランティア・市民活動振興センター
園崎 秀治、大場 尚子、金谷内 徹、赤坂 聡太



案内掲示板拡大印刷については、富士フィルム ビジネスサプライ株式会社のご協力で作りました。



ボランティア全国フォーラム2016

～ボランティア・市民活動の未来をみすえる～
(2016年11月5日・6日開催)

厚生労働省国庫補助事業
社会福祉法人 中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」助成事業



「広がれボランティアの輪」連絡会議
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

事務局：社会福祉法人 全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センター
〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル
TEL 03-3581-4656 FAX 03-3581-7858

平成29年3月発行